

# 日本思想史事典

日本思想史事典編集委員会 編

Encyclopedia of Japanese Intellectual History

Editorial Committee of  
Encyclopedia of  
Japanese Intellectual History

丸善出版

## キリストン

▶1 天道思想 p. 362, ▶2 古典の傳承と商業出版 p. 384, ▶3 排耶論 p. 382

キリストンとは、16世紀にヨーロッパのカトリック宣教師によってもたらされたキリスト教が、日本に土着化した信仰あるいはそれを信じる人々を指す。江戸時代には「切支丹」「喜利志端」などと表されたが、それ以前には「だいうす門徒」(『多門院日記』『信長公記』)「伴天連門徒」(秀吉の「伴天連追放令」)などと呼ばれており、「キリストン」という語の定着は江戸時代以降である。1620年に著された『破提字子』(不干斎ハビアン著)の「提字子」は従来いわれているように、万物の創造主であるキリスト教の神「デウス」のみを指す語ではなく、キリスト信仰そのものを指す。すなわちこの頃はまだ「キリストン」と「だいうす門徒」は一般認識として併存していた。また潜伏キリストン(江戸時代の禁教下、秘かに信仰を維持した信徒を指す)、カクレキリストン(明治以降の禁教解禁後も先祖代々のキリスト信仰を維持する人々)などの用語があるが、現代の学術用語であって、これらの人々が当時そのように呼ばれていたり、自称していたわけではない。後述する〈キリストン版〉やキリストン信徒に伝存した諸書に拠れば、キリストンにとって最重要なのは「アーニマの助かり」であった。アーニマは通常「靈魂」と訳されるが、デウスへの信心を通して来世での救済が約束された対象であった。来世や往生についての解釈は、同時代の仏教諸宗派の間でもそれぞれ異なっていたが、戦乱の時代、「来世での救済」が多額の布施等ではなく、善行によって保証されたキリストの救済は、日本人の眼に確実に魅力的に映ったであろう。

●佛教としてのキリスト教受容 日本におけるキリスト教の導入は16世紀ヨーロッパを席巻した宗教改革の動きと密接な関係がある。プロテスタントの躍進に危機感を抱いたカトリック内部の刷新運動によって誕生したイエズス会をはじめとする、改革的な修道会によって、ヨーロッパ以外の地域への「伝道」が盛んに行われたからである。カトリックの守護者を標榜するスペイン・ポルトガルの国王たちからの支持もあり、カトリックの世界布教は両国の領土拡張の動きと不可分な関係(パトロナート)にあったが、すでに政治・文化的に成熟していたアジアの諸地域では、商人や宣教師たちは現地の社会・文化システムに応じて、そこへ溶け込んでいく手段を探らざるを得なかった。1549年、イエズス会の創設メンバーの一人F.ザビエル(1506~52)は鹿児島出身のアンジローを援けとして日本での布教を開始したが、教義の説明に必要な単語の訳にはアンジローを介して佛教用語が取り入れられた。そのため、キリスト教の神「デウス」が「大日」と訳されたり、聖母マリアが「観音」と認識されるに至った(『ドチリナ・ブレ

ベ』)。ザビエルに続くイエズス会士たちはキリスト教の基礎的かつ重要な用語には、ポルトガル語をそのまま用いることにしたが、一度定着した「天竺」から来た「仮教」という認識は簡単には塗り替えることはできなかった。キリスト教と日本仏教の差異化を目的に、宣教師による日本仏教研究も進み、仏僧らとの宗論もたびたび行われたが、一般信徒のレベルでの教義理解は「仮教」の一種というものに長くとどまつたと考えられる。それは秀吉の「伴天連追放令」関連文書(伊勢神宮文庫所蔵天正15年6月18日付条文)に、「八宗九宗の儀」と表現されていることからも明らかである。

このような認識の背景には、イエズス会士の一部に日常的に仏僧の装束を用いる者があったこと、「教会」といっても、そのほとんどは仏寺を再利用したところで、キリストンに改宗した元仏僧たちが「看坊」や「同宿」として常駐し、信徒を指導したことがある。この時代、キリストン界と日本佛教界は激しく対立してはいたが、実際にはキリストンに改宗した仏僧あるいは修行僧は、「同宿」としてイエズス会に重用され、宣教師の仕事の大部分を支えていた。「同宿」たちの主な職掌は、信徒への説教、教理の解説、教会の維持、文書の執筆、伝達、受け取り、茶の湯係、葬儀、ミサなどの行事における諸雑務、来客の饗應などであった(『日本諸事要録』)。同宿たちの外見は剃髪者であり、この点においても、キリストン指導者は外見的に仏僧とほとんど差異がなかった。また信徒への説教をはじめとする司牧の大半を担ったのは、日本人の修道士または「説教師の同宿」と呼ばれる、同宿の中でも1ランク高く置かれた日本人であった。後に棄教して代表的な排耶論者となった不干斎ハビアン(1565~1621)が、イエズス会の修道士であった頃にキリストンの教えを入門者に解説する目的で執筆した『妙貞問答』(1605)には、同書の目的を「上ノ卷ニハ、仏法ノ空無ヲ本トセバ、皆邪ナル法也ト嫌イ退ケ、中ノ卷ニハ儒道ト神道ノ赴<sup>おもむき</sup>ヲ論ジテ、キリストンノ真<sup>ほん</sup>ノ教ニハ遙ニ異ナル理<sup>ことわり</sup>を示シ、下ノ卷ニハ、吾宗キリストンノ教ノ真ヲカツ揚テ顯シ侍』とある。すなわち同書は、キリストンが仏教・神道とは異なる宗教であることを明確化することを目的としており、そうするべき必要性が存在したのである<sup>1</sup>。

●ヴァリニャーノによる諸改革 1571年に来日した東インド巡察師A.ヴァリニャーノ(1539~1606、ナポリ王国のキエーティ出身)は、日本社会と布教状況を観察し、主に日本人修道士からの聞き取りなどを参考にして、現地の文化や政治状況に馴染むような宣教の形態を考案し、諸制度の改革に取り組んだ。一般的にこれは「適応主義」と呼ばれ、文化相対主義の先駆けとみなされる傾向があるが、実際には信徒数拡大のための「外見的模倣(日本の場合、その対象は仏教)」であって、眞実、布教地の文化を好意的に理解して、それに応じるというものではなかった。また日本ではすでに既成事実化していたキリスト教神学に抵触する事態(一例として、信徒の先祖崇拜、一夫多妻制の容認など)も、神学的に是認

されうるよう、特例的な教義解釈をヨーロッパの神学者たちに求めた。いえ、ヴァリニヤーノの「適応主義」は、他のヨーロッパ人宣教師たちからも歓迎されず、保守的な日本布教長カブルとの対立のみならず、様々な騒動を引き起こした。日本イエズス会内部ではヨーロッパ人と日本人の衝突がしつこく表面化し、布教や為政者との交渉に不可欠な日本人修道士（不干齋ハビアンや千々石ミゲル等）の離脱や棄教を引き起こした。

ヴァリニヤーノが主導した布教改革の一つに、教理書の翻訳と印刷事業がある。ヴァリニヤーノは第2回目の来日（天正少年遣欧使節の帰国）の際に、古董印刷機を導入した。印刷事業はコレジオの内部で行われたが、長崎市中ではキリストンの有力商人後藤宗印が独自に印刷所を運営していた。これらの印刷物（キリストン版）は32種類の現存が確認されているが、実際には50種類以上印刷されたといわれる。主にイエズス会の教育施設で修道士や同宿、学生などが信託し説く教理を学ぶ教科書であったが、日本人の年少者やヨーロッパ人宣教師が日本語を学ぶためのテキストとして『平家物語』や『伊曾保物語』なども印刷された。

●禁教への道 日本における公的な宣教師追放令は、1565年正親町天皇によって出されている。これにより、当時京都で布教活動に従事していたガスパー・ヴィレラや日本人修道士ロウレンソなどは堺へ一時に逃れた。その背景には、政権に近い仏僧たちの強い働きかけがあり、この時点ではまだ政治的な理由とは直接的に関係していなかった。しかしながら、秀吉が九州平定後、1587年7月（旧暦6月19日）に打ち出した、いわゆる「伴天連追放令」は、秀吉の政治的意図を色濃く反映したものであると考えられる。この「伴天連追放令」発布の前日に作成された11か条から成る覚書（伊勢神宮文庫蔵）では、キリストンに改宗した領主たちによる神社仏閣破壊が非難され、「式百町式拾參千貫より上之」执行を持つ領主は、キリストン入信には公儀の許可が必要な旨、領民の強制改宗は禁止の対象である旨が伝えられている。11か条のうち、三つに及ぶ条目が一神宗ならびに本願寺との比較あるいは関連で触れられ、伴天連門徒が「一向宗よりも外」であるとされることからも、キリストンの危険性の基準は「一向宗」であった。加賀の一一向揆にあえて言及する点からは、九州入り後に詳しい状況を知る長崎の様子が、秀吉の目には加賀と重なってみえたと思われる。

この頃の長崎は、大村純忠からイエズス会に寄進され（1580）、純然たる「伴天連の寺社領」であった。範囲はそれほど広大ではないものの、南蛮船の入港地として得られる利潤は、当時の日本の他の地域には見出せないものであった。伴天連追放令の結果的処置として、秀吉は長崎をイエズス会から没収し、代官を置いて天領とした。とはいえたが、伴天連追放令の内容は、有無をいわさず宣教師を国外追放するものではなく、「(日域之) 佛法のさまたけを成さざる輩ハ、商人之儀申すに及ばず、いつれにてもきりしたん國より往還くるしからず」というもので

あったから、目立たぬ形で宣教師が日本に留まることは默認された。その背景には、当時マカオから到来する貿易船との交渉にイエズス会が不可欠であったことがある。秀吉自身もイエズス会を通じて、貿易船への投資や商品の買付けをおこなっていた。秀吉の「伴天連追放令」は、秀吉が周辺国に「武威」を認めさせる強圧外交を始める前のことであり、スペイン人が征服しているフィリピンの状況についても十分な情報は得られていない時期であるので、秀吉の意向の背景には、その時点では「侵略者への警戒」は見えてこない。とはいって、当時の為政者が、スペイン・ポルトガルによる海外での侵略行為に無知ではあるわけではなく、ヴァリニヤーノ著『日本諸事要録』（1583）では、日本人の為政者がポルトガル人の領土的野心とそこに係る宣教師の働きを警戒していることが述べられている。このヴァリニヤーノの観察が、1583年という比較的早い時期のものであるのは注目に値する。1590年代に日本人（特に薩摩・大隅地方の商人・船乗り）のフィリピン渡航が増え、スペイン人の動向に関する情報が入り始めると、秀吉の警戒意識も高まり、サン・フェリペ号事件、26聖人殉教事件等を経て明確なキリストン禁制へと変化していった<sup>13</sup>。

●宣教師による南蛮文化の振興 江戸時代初頭の日本の総人口は1200万人程度と推定されているが、同時期のキリストンの数は30万人程度であったといわれる。40人に1人がキリストンであったと考えれば、1549年の伝道開始以降、それは急速かつ強い勢いで広まっていたといえるであろう。九州のキリストン大名による集団改宗以外にも、上方などの都市部を中心にキリストン信仰は確実に広まっていた。キリストンの教会では、信仰の導きだけではなく、ヨーロッパ文化の伝授も行われた。初期の京都布教で改宗した人物の中に、賀茂在昌らの陰陽道学者がいたことからも、宣教師が齋す知識、とりわけ医学と天文学に関するものは、信仰の如何を問わず知識人の強い関心を惹くものであったと考えられる。1633年に棄教したイエズス会司祭クリストヴァン・フェレイラ（沢野忠庵）は、晩年、排耶書の『顕疑録』以外に、天文学書の『天文備用』や医学書『南蛮流外科秘伝』などを著した。それらの学問的解説は、日本人がヨーロッパ人宣教師に求めた役割の一つであり、彼らの説くことに合理性を見出していたからにほかない。大地が球状であることや太陽暦の存在は、キリストン禁制後も蘭学者たちの間で、「常識」として受け継がれていくことになる。医学（特に外科）もまた、南蛮流を基礎として、その後少しづつ出島を経由して齋されるヨーロッパの情報を取り入れながら進化していった。

[岡 美穂子]

#### 参考文献

- ヴァリニヤーノ、A.・松田毅一監訳『日本巡察記』（平凡社東洋文庫、1973）、「日本諸事要録」「補遺」を所収）・安野貞幸『バテレン追放令』（日本エディタースクール出版部、1989）・五野井隆史『キリストンの文化』（吉川弘文館、2012）・高瀬弘一郎『キリストンの世紀』（初出1993、岩波書店、2013）・高瀬弘一郎『キリストン時代のコレジオ』（八木書店、2017）